

わが国近代の住宅における「子供室」の出現とその推移について

瀧上貴由樹*・石川宏樹**・後藤隆太郎***・丹羽和彦***

The appearance and the transition of the "children room" in the modern houses in Japan

By

Takayuki FUCHIKAMI, Hiroki ISHIKAWA, Ryutarō GOTO and Kazuhiko NIWA

Abstract : From the latter Meiji Era to the early Showa Era, the trials of new living style spread in the middle class houses in Japan. The appearance of a "children room" will be also listed to the one of that attempts. In this paper, we consider the time of the appearance used name: "children room" and the change of its position at the floor plans contained in housing books published in those days. The main clarified points are as follows: 1) The early "children room" can be checked in the latter Meiji Era, and it become popularize after the latter Taisho Era. 2) At the beginning, "children room" occupied at the first floor. But, when the Showa Era, "children room" connected with the parents bedroom and its position moved to at the upper floor.

Key words : "children room", parents bedroom, middle-class houses, modernization

はじめに

大正期から昭和初期にかけてわが国では、比較的恵まれた階層である棒給生活者層を中心にしてより文化的な生活を求めようとする機運が高まった。それは独立住宅においても例外ではなく、棒給生活者層の住宅、すなわち中流住宅を中心にして居住生活の改善を試みる提案がなされる。提案の内容は技術的なものにとどまらず、中には思想的な性格をもつものにまで及ぶが、中流住宅はそれらの取捨選択の過程を経て、変容を遂げるに至った。

近代における居住空間の質の変容として、それまで存在しなかった「子供室」（以下、「」を省略する）の出現が一つに挙げられる。それまでの住宅というものは「いえ」や主人を中心とする家長制度が反映されていた。それがこの時期になると、主婦や子どもの生活を見直そうとする居住環境の改善が求められるようになる。子どものための部屋を設けるといった動きもこの頃に顕著になったと想定できよう。しかしこれまでの研究において子供室の出現時期の特定やその変遷過程について主だった検討はなさ

れていない。

ある事柄の浸透や変遷について検討する際、特殊なもの、先端的なものばかりではなく、より一般的なものも対象とする必要がある。そのため先駆的な住宅や特異な住宅作家等を扱うような個別研究とは自ずと異なる方法を探らなければならない。そこで本稿では当時出版されたごく一般的な住宅関連の書籍を取り上げ、そこに掲載された図面等を中心に数量的検討を行うことで、総体的な傾向の把握を試みる。これらの作業をとおして近代における子供室の出現とその推移について考察し、わが国独立住宅の近代化過程における性格のひとつを明らかにすることを目的とする。

1. 研究対象について

本稿では既往研究¹⁾を踏まえ、住宅においても近代化が大きく進み、その過程で様々な提案が試みられた明治後期から昭和初期までを時間的な範囲とする。用いる資料については、当時刊行された住宅関連の書籍を用いる²⁾。これらは近代化の過程で発生した会社員や官公吏員などの比較的恵まれた近代的棒給生活者を中心とした住宅を主に取り扱っているものが多く、当時の中流住宅に対する計画的な思想を読み取ることが期待できるためである。中には当時実施された住宅設計競技の図案集など、提案に

平成 18 年 11 月 1 日受理

* 工学系研究科システム生産科学専攻博士後期課程

** スウェーデンハウス株式会社

*** 理工学部都市工学科

©佐賀大学理工学部

『中流和洋住宅集』(文献No. 38)をみると、主婦之友社といった子どもの生活環境を重視すると判断できる編者の文献においても10件中2件という少数な値を示す場合も確認できる。その一方では、朝日新聞社版、『朝日住宅圖集』(文献No. 40)のように、78例中74例の案に子供室が描かれているといった、高い比率をもつ文献も存在する。この図集にある記述に注目すると、中小住宅建築設計競技詳細規定の中に、「想定建築敷地、所在東京近郊にして敷地は一面道路に沿い面積五十坪以内とす⁴⁾」とあり、延床面積も20坪から40坪程度に集中している。これは当時としては小規模な住宅を扱っており、床面積の縮小化という状況下でも子供室を設けようとする動きが高いことが確認できる。

以上のことをまとめると、明治後期頃には既に子供室の記載が一部の住宅平面図において確認できた。ただしそれ以前に出版された住宅関連書は数が限られていると想定され、かつ当該資料の数の確認が難しかったため、出現時期を特定するまでには至らなかった。子供室を設ける住宅図案を多く掲載する文献が現れ始めたのは大正後期以降で、文献によってその差にばらつきがあるが、この頃を境にして子供室が住宅設計の中に定着していく動きが一般化し始めたと思えることができる。ただし依然低い比率を示した文献も存在していることから、さらにそれらの性格を把握し、記述内容についても詳細に検討する必要があるだろう。

3. 住宅平面図における子供室の推移

3.1. 位置する階

この章では、住宅の二階建て化といった階数の変容を視野に入れて、住宅の位置の推移について検討を行う。そもそも近代化以前のわが国の住宅にとって二階という概念は、商家などの一部特殊なものを除き存在しなかったといってもよい⁵⁾。近代期における二階の登場という大きな平面構成の変容は、子供室の配置にもながしかの影響を与えている可能性が考えられる。

ここでは二階建て住宅の住宅平面図に限り、一階、二階どちらに子供室が位置しているのかをみていく。まず、全体的な比率をみてみると、子供室が一階に位置している住宅平面図は、二階建て住宅にみられる子供室の総数216例中80例の37.0%、逆に二階の方に位置しているものは136例の63.0%という結果になった。対象とする時期全体においては二階に位置する傾向が強い。

次に、子供室が一階、二階どちらに位置するか比率として換算したものを、文献の出版年順に示し、その推移をみた(図-4)。これによると大正後期頃までについては、一階に位置する住宅平面図の方が多かった。ただし、なかには一階、二階

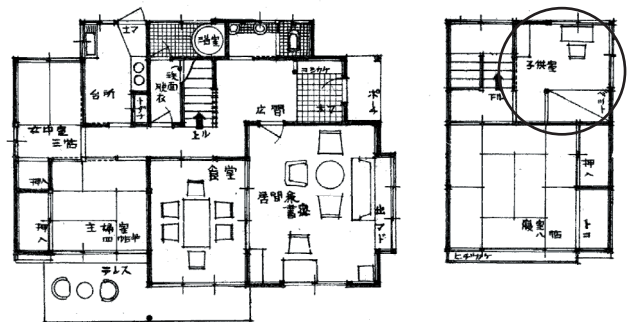


図-3 二階に位置する子供室(『五室以内の新住宅設計』より)

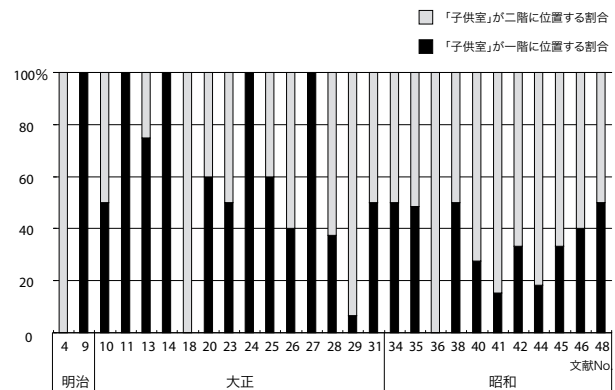


図-4 子供室が位置する階別からみた住宅平面図の比率(二階建て住宅に限定)

のいずれかに傾向が偏っている文献も散見できる。昭和期に入ると、そうした傾向を示す文献は見られなくなり、二階に位置する住宅平面図の方が多く占めるようになる。

以上の結果を踏まえると、当該時期全体としてみた場合、子供室が二階に位置する住宅が多いことが分かった。しかし経年的な変化としてみた場合、大正後期頃までは一階に子供室を設ける傾向にあったとみることができる。ただし、一階、二階どちらかに傾向が偏っている文献が複数確認でき、それらが対象期間の前半部分にみられる。これは選択した文献の性格に起因することもあるだろうが、子供室を一階、二階いずれの階に設けるべきか判断しかねている時期であったと捉えることもできよう。それが昭和期に入ると、徐々に二階の方に位置していく傾向を強めていったと考えられる。

3.2. 子供室と寝室との位置関係

上記の結果より、大正後期から昭和初期にかけて平面図上における子供室の二階への移動を大まかに確認することができた。ここではさらに寝室⁶⁾との位置関係という視点から、子供室周辺の状況の変

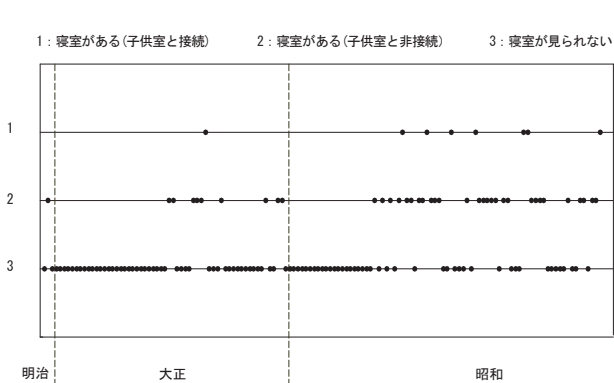


図-5 平屋建て住宅における子供室と主寝室の位置関係

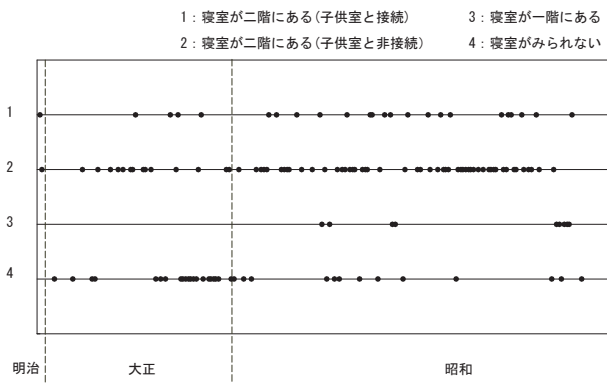


図-7 二階建て住宅における子供室と主寝室の位置関係
(子供室が二階に位置する場合)

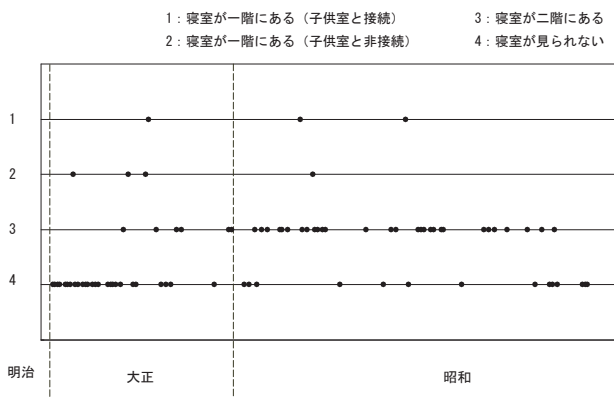


図-6 二階建て住宅における子供室と主寝室の位置関係
(子供室が一階に位置する場合)

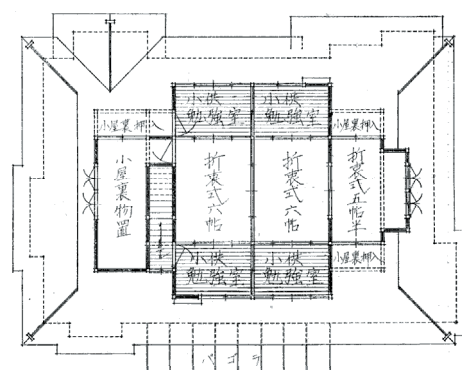


図-8 小屋裏を二階として利用し子供室にあてている住宅
(『住宅建築の実際』より)

化をみていくこととする。平面図上の寝室の特定については、子供室のときと同様に寝室に関連する室名の記載が確認できることを条件とした。なお、これまでの検討によって子供室の位置する階に変化がみられることから、平屋建て住宅と二階建て住宅の場合に分け、さらに二階建て住宅の場合、子供室と寝室双方の位置する階の同異を判断して、互いの位置関係をみていくこととする。

3. 2. 1. 平屋建て住宅の場合

平屋建て住宅において、子供室と寝室との位置関係の関連性を表す指標として、まず寝室の記載の有無、そして子供室と寝室との接続関係について検討し、それに該当するものを振り分け年代順に並べていった(図-5)。なお、ここで述べる接続とは室から室へと直接の行き来が可能な状態を示し、室と室が非接続⁷⁾の状態とは区別して扱うこととする。

この図によると明治後期から大正前半にかけて寝室を確認できないものが集中していることが分かる。なぜ寝室の記載が確認できないかというのは、それらの室が畳敷きで構成され、何帖といった表記でなされていることが多く、室機能の特定が困難で

あるものを寝室がみられないものとして分類したことが要因として挙げられる。さらに、中には寝室のスペースをも持たない場合がみられた。これらは居間を寝室と兼用していたものと考えられる。

それが大正後期頃を境に寝室の表記・位置を確認できる平面図が増加していく傾向にある。寝室が確認できるものに限ってみると、子供室とは接続しない平面が大正後期から昭和初期を通して認められる。一方で寝室と子供室が接続している平面は昭和期に入った後に数例確認することができる。

3. 2. 2. 二階建て住宅で子供室が一階に位置する場合

二階建て住宅で子供室が一階に位置する場合における寝室との位置関係について検討する。まず寝室の記載の有無、そして寝室が確認できたものについては、寝室がどの階に位置するのか、さらに子供室との接続関係についても確認した(図-6)。この図によると平屋建ての場合と同様に、対象時期の初期にあたる住宅平面図は、寝室の記載が確認できないものが多く、それが大正後期以降、寝室を確認することができるようになる。次に、寝室が確認でき

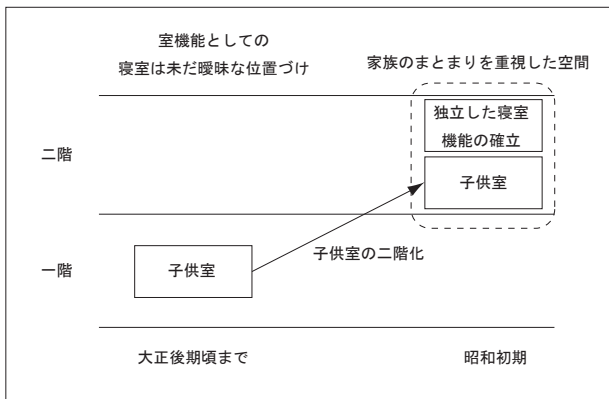


図-9 子供室と寝室の位置関係の動きからみた平面構成の変化

るものに注目すると、それらの多くが二階に位置していることが分かる。その一方で子供室が一階に位置し、寝室も一階に位置している事例はほとんど見られない。このことから、二階建て住宅で子供室が一階に配置された場合、寝室は二階に位置していることが多く、子供室と寝室との関係性はあまりないものとして扱われている事例が多いといえる。

3. 2. 3. 二階建て住宅で子供室が二階に位置する場合

最後に二階建て住宅で子供室が二階に位置する場合における寝室との位置関係について検討する。前述した検討と同様に、まず寝室の記載の有無、そして寝室が確認できたものについては、位置する階、子供室との接続関係について確認を行った(図-7)。まず寝室の記載が確認できない住宅平面図は大正後期までに集中している。寝室が一階にあるものは事例がほとんどみられない。これらの図案を詳細にみると、小屋裏を二階として利用し、その空間全てを子供室に充てており、結果的に一階部分に寝室が位置しているというものである(図-8)。一方、子供室と寝室が共に二階に位置している事例は大正期中頃から数多く確認することが出来る。双方の接続関係についてみると、接続していない事例の方が多く、かつ大正期中頃からそれが一定の頻度で確認できる。そして、子供室と寝室が接続している事例は前者と比べると数は少ないものの、昭和期に入るとこちらも一定の頻度でその事例をみる事ができる。

以上のことをまとめると、まず大正期中頃まで寝室という記載のある住宅平面図は少なく、当時の平面から主人が寝る場所を特定することは困難な場合が多い。また、居間を寝室として兼用させていると考えられる事例もあり、畳敷きを主とする当時の住宅では一つの部屋で複数の機能をあてており、平面図上に記載するのは難しかったのであろう。した

がって室名の記載を追う限りでは、子供室の方が寝室よりも早く平面図上に登場し、子供の部屋として独立した室機能を確保する傾向にあったことを読み取ることができる。それが大正の終わり頃から昭和期に入る頃になると寝室についても平面図上に記載されるようになる。図-6、図-7の結果から、この頃になると子供室がどちらの階に位置したとしても、寝室は二階の位置に固定される傾向が強かったことが確認できる。

既に述べたように子供室は大正後期頃までは一階に位置する傾向にあったが、昭和初期に入ると徐々に二階へ移動する傾向にあった。これは寝室という室機能の確立が子供室の二階部分への移動を促したともみることができ、それは二階部分の平面構成が家族個々の空間を主として計画されるといった質の変容を表す過程の一部として捉えることができよう。さらに子供室と寝室の接続関係については、全体的に接続しない事例の方が多く、昭和期に入ると接続している事例も幾つか確認できた。これはひとりひとりの場所をつくり出していく傾向をもちながらも、一方では個人の独立性を高めるといった配慮にまでは至っていない事例も多いことを示し、個人への配慮というよりも家族としてのまとまりを重視した空間をつくり出すといった意味合いの方が当時としては強かったことを指し示していると推測できる。

以上のように、寝室は当初一階か二階のどちらかに位置しているかという以前に、その室機能の判別も曖昧であった。子供室は寝室よりも早い時期に独立した室機能として確立していったが、初期の段階では一階か二階どちらの階に位置するかは定着していなかったと考えられる(二階建ての場合)。それがやがて昭和期に入ると、主人が寝るための部屋としての機能が住宅のなかで確立されてゆき、それが二階部分に現れるようになる。その時期を同じくして、子供室の位置もようやく二階の方へと移動する傾向を強めていくようになる。

まとめ

本稿では、子供室の出現時期と、その位置の推移について経年的な分析から検討を行った。出現時期については、早いものは既に明治後期頃から子供室を確認できた。ただしそれ以前の時期については資料の確認が難しく、今回の分析で出現時期を明確に特定するまでには至らなかった。大正後期以降になると子供室を有する住宅が増え始め、中流住宅において子供室をもつことが一般化し始めた考えられる。

次に住宅における子供室の位置の推移については、大正後期頃までは一階に位置するものが多かったが、昭和期に入ると、二階部分へと移動する傾向

が確認された。これは以前までは曖昧な扱われ方をしていた寝室が徐々に独立した室として確立し、寝室が二階部分に固定されたことが大きく関係していると考えられる。これは二階部分を子供室と寝室をまとめて、家族的な空間として包括的に扱うことを意図したことが反映していると見ることができ、子供室の二階への移動はその一連の動きを表すものと捉えることができよう。

註

- 1) 代表的なものに、木村徳国「日本近代独立住宅様式の成立と展開に関する史的研究」、北大工学部研究報告 No. 18-21、昭和 33-34 年。九州大学青木研究室「中流住宅の平面構成に関する研究 (1)-(3)」、住宅建築研究所報 No. 9-11、昭和 58-60 年。内田青蔵『日本の近代住宅』、鹿島出版会、平成 4 年。等がある。
- 2) 本稿で用いる文献は近代住宅史のこれまでの研究において用いられるものをほぼ網羅しており、また子供室の検討に必要なものを対象としている。これらの文献を扱った同様の研究については、立川智浩・丹羽和彦「わが国近代の住宅における「二階」の展開」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2003 年。が挙げられる。
- 3) 対象文献の住宅平面図に記載されていた「子供室」の室名の表記は以下のものが挙げられる。(子供室、子供間、子供部屋、子供書斎、子供之間、學齡子女室、小児室、児童室、學齡児童室、勉強室、兒女室、子供遊室、子供寢室)
- 4) 朝日新聞社版、『朝日住宅圖案集』、朝日新聞社、昭和 4 年 6 月、巻頭「中小住宅建築設計競技詳細規定」。
- 5) それまでの二階には「望楼」「樓閣」などの特殊なものに限定されていたといえる。江戸期に入ると大都市の商家などに一部現れるが、専用住宅においては明治の後期を待たなければならない。
- 6) 本稿で述べる寝室とは複数の機能を持たない寝るためだけに用意された部屋としての意味で用いる。また、平面図の表記からの抽出では誰のための寝室かまでは特定することは困難なため、ここでは家族の誰が寝るかといった限定までは行っていない。
- 7) ここでいう非接続とは、室と室の直接の行き来を可能にしていない状態を示す。よってここでは室同士が隣接している場合や、室と室がある程度離れている場合も非接続として同様に扱った。

図版出典

- 図 - 1 佐藤功一、『報知懸賞住家設計図案』、大倉書店、大正 5 年 10 月、p28、第十八圖。
- 図 - 3 朝日新聞社刊、『五室以内の新住宅設計』、朝日新聞社、昭和 7 年 4 月、p. 156。
- 図 - 8 山田醇、『住宅建築の實際』、新光社、昭和 7 年 5 月、p. 355